
戦国の魔術師

キタキツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国の魔術師

【Nコード】

N0600Z

【作者名】

キタキツネ

【あらすじ】

*魔法の存在する戦国時代を舞台にした、架空戦記物です。

主人公が飛ばされた世界、そこは

魔法が存在し、女性大名が天下を賭けて争う

パラレルワールドの戦国時代だった。

その世界で最速の魔術師となった主人公は

織田家と協力関係を結び、元の世界に戻る術を探す。

第一章 第一部 黒衣の魔術師

「……ぬうつつ！ おのれ『黒衣の魔術師』め！……者どもっ！
怯むな！ 所詮、奴は魔術師。詠唱中に斬りつければよいのだ！
一斉に斬りかかるのじゃ！」

豪華な屋敷の奥深く。松明により煌々と照らされたざつと二十畳はある広い部屋のさらに奥で、厚い人垣に幾重にも守られた中年の男、ス波義銀が吼える。

「応っ！」

それに野太い声で応えた周囲の兵士たちが、白刃閃かせ僕のほうへ殺到してくる。そういやこの時代、もはや名乗りを上げての一騎打ちは廃れてたっけな。……ま、それは僕の知っている歴史のことだから、この世界に当てはまるかどうかは知らないけど。

カチリ

僕の右手がコートの中にもぐりこみ、スイッチを押す。キュルンと、耳慣れた百倍速の高速言語が紡ぎだされる。それは前へと向けた左手を伝い、白銀の波動へと形を成し目の前に迫っていた兵士を数名、轟音とともに薙ぎ倒す。

一番単純な攻撃魔法、『魔道波』だ。魔力を直接叩きこむだけの単純な魔法だが、地水風火、いわゆる四大精霊の力も、聖属性、闇属性の力も借りる必要がないため、僕にとっては詠唱時間がほとんど0に等しく、極めて使い勝手がいい。

「弓手隊。構えっ！！」

っと。こっちの兵士はおとりだったか。

目の前の徒歩武者に対応する僕から見て左手、月明かりに照らされた広い庭に、いつの間にか整列した弓手隊が指揮官の号令の下、一斉にこちらへ向けて弓を絞る。……なかなか考えられているじゃないか。ちよつと見直したよ。

「ふははははっ！ 油断したな『黒衣の魔術師』よ！ 『防御結界』が切れかけておるぞ！ その状態でこの数の弓矢を防げるかなっ！？」

義銀が高笑いを上げる。

……知ってます？ そういつの、死亡フラグって言うんですよ？
「なるほど。目の前の兵士に気を向けさせておいて、その隙を突くように庭から弓手による一斉射撃。なかなか考えられた戦術です。……けど効果のほうはどうでしょう？ 試してみてはいかがですか？」

「この期に及んで命乞いしない、その姿勢は認めてやろう。……射よっ！」

十を超える矢が空気を裂いて僕に襲い掛かる。が、『身体能力向上』の魔法を帯びている僕にとって、その全てを回避するのは容易い事。サービスで二、三発当たってやつても、大した怪我にもならないのはわかってはいるが、それでもやっぱり痛いものは痛いので素直に回避しておく。

「なっ……！？」

「……これで終わりですか？ じゃあそろそろ……」

確信していた勝ちをあつさりと覆されて絶句する義銀に向け、さつさと仕事を終わらせるべく、ゆっくりと歩き始める僕。

「射よっ！ 射よっ！ この距離で何度もかわせるものではないっ

！ 射よっ！」

義銀の絶叫に煽られるように、再び迫る弓手隊の攻撃。ああもう、めんどろだなあ。

カチリ

きゅいん…… という起動音とともに、僕を半円状に覆う防御結界が再発動される。この結界は一定時間、一定の強度で自分に向けられた物理及び、魔法攻撃を防ぐ聖属性魔法だ。時間とともに効果が薄れ、また結界を形成する魔力の強度以上の攻撃を受けると消滅するが、たかが十数本の弓矢程度で崩れるものではない。…… 本来であれば、熟練された魔法使いでも二分弱程度の詠唱時間が必要となる魔法である。僕にとっては一秒未満だけど。

僕に向けられた幾つもの矢は、それを貫くことができずに全て叩き落される。その光景に呆然とする弓手隊の指揮官を、他の兵士ごとまとめて魔道波で吹き飛ばし、再び義銀と向き合う。

「ばかな……！ 防御結界を一瞬で展開することなど出来るはずが……」

「それができるから、『黒衣の魔術師』は恐れられているのですよ。……ま、とにかくそろそろ素直に武器を捨てて……」

降伏を促す僕の声は、今度は右から聞こえた轟音によって遮られた。

漆喰の壁を力任せにぶち抜き、瓦礫の中から3メートル程度の高さの石人形がゆっくりとその姿を現す。

「お頭！ 遅くなりやした」

「待っておったぞ！ はようその小童を捻りつぶせ！ 褒美は望み

のままじゃ！」

強大な石人形の足元、その背後に隠れていた小男が僕に向けて嫌な笑いを浮かべる。……どうやらこいつが石人形を操る妖術師のようだ。

「南蛮渡来の石人形。貴様も魔術師の端くれなら、その強大な力はよく知るところであろう。対魔法使い用の兵器としてこれ以上の物はないということも、な。……やれっ！」

小男の声に石人形が反応する。僕に向かい振り上げられる固い拳。大人しく殴られる趣味はないので後方へ飛び、大きく距離をとる。石人形は僕という目標を見失い、固い木製の床にその拳を叩きつけ、轟音とともに大穴を開ける。力が強いという以前に、その重量自体が立派な武器になるわけか。

「南蛮渡来……。ゴーレムというやつですね。実際に見るのは初めてです。噂通り魔法が効かないかどうか、試してみますか」

威力を最大にした魔道波を連続で叩きつける。……うわあ、小揺るぎもしない。対人においてはそれなりの殺傷力を発揮するこの魔法も、石の塊相手では如何ともしようがない。

「効かぬ効かぬ。高速詠唱が自慢の『黒衣の魔術師』と云えど、一介の魔術師。こいつの固さ、その重量の前では手も足も出まい。……さあ、諦めてその首を差し出すがいい。武士の情けだ。一撃で終わりにしてやる」

「それはいかんぞ。儂らをここまで追い詰めてくれた、その報いは受けてもらう。一思いにやらずに、じわじわ痛みつけてやれ」

「お頭がそう仰るのであらば……。小僧、そう言うことだ。楽には逝けぬぞ？」

そう言ってまずまず嫌な感じで唇を歪める小男。

「どうせ最初からそのつもりだったのでしょうか？ 妖術師というのは性格歪んでる人が多いと聞きましたけど、本当ですね」

「き、貴様っ！ 拙者を愚弄するかっ！ 四肢をばらばらに引きちぎってやる！」

小男の言葉に反応した石人形が左右の拳を振りかぶり、交互に振り下ろす。

僕はそれを避け、右へ左へと飛びまわる。その隙を突き、妖術師本体に魔道波を放とうとするが、この小男、意外な敏捷さで常に石人形の背後に隠れるため、なかなかそのタイミングが掴めない。

「ふははははっ！ 手も足も出まい！ 逃げ回るだけか『黒衣の魔術師』よっ！」

実は手も足も出る。この石人形を潰す手段など幾らでも思いつく。水系の上級魔法で氷漬けにしてもいいし、火系上級魔法で溶岩になるまで熱し続けてもいい。ただ、どちらも後始末が面倒なので躊躇っているだけだ。氷漬けの石人形など置いていかれてはこの地に住む民にとっていい迷惑だろうし、大火事を発生しかねない火系上級魔法など論外である。

「さて。どうしましょうか……。っと、そうだ」

ぽんつと手を打つ。多分、あれが効くはず。

「どうした『黒衣の魔術師』よ。命乞いの言葉でも思いついたか？」

「いやいや。本は読んでおくものですねえ。対策を思いつきました。

……そこ、危ないですから離れたほうがいいですよ？」

「戯言を……！」

「忠告はしましたからね。いきますよ？」

僕は、今度はサポート魔法を呼び出す。『探查』の魔法を選択し発動。石人形をスキャンする。……うん。やっぱり『核』がある。……『ゴーレムには核があり、それを破壊すると行動が止まる』。昔、まだ元の世界にいた頃読んだ本にそんな話があった。知識とは偉大だ。例えばそれがライトノベルから得た知識であつたとしても、ね。

「貫けっ！」

今度は『魔道波』ではなく、『魔道砲』を選択し発動する。『魔道砲』は『魔道波』と同じ、魔力を叩きつけるだけの初期魔法の一つだが、『魔道波』が言葉の通り『波』、つまり扇状に広範囲に広がるのに対し、『魔道砲』は指向性をもって魔力を一点に凝縮する。先程のような一对多数の戦闘においては、威力こそ劣るものの範囲攻撃である『魔道波』のほうが使いやすい。が、一对一、または遠距離からの狙撃などにおいては『魔道砲』のほうが便利だ。その凝縮された魔力は、石の城壁ですらやすやすと貫通する。

——僕の手から発せられた光の矢は、ピキーンという甲高い音とともに石人形の核を正確に貫く。

核を破壊された石人形はその行動を停止し、一瞬の停滞の後、全身がばらばらとなり崩れ落ちた。

目の前に大質量の石の塊が落ちてきた衝撃で、小男の妖術師は泡を吹いて気を失っている。だから危ないって言ったのに。瓦礫で圧死しなかったただけ運のいいことである。

「……さて、と」

「ひっ、ひいいいっ！」

腰が抜けたのであろう。座り込んだままずりずりと後ずさる義銀の胸倉を掴む。

「……質問に答えてもらいましょう。織田様の領内から連れ去った女子供、どちらに監禁していますか？」

「……………」

「黙秘ですか。いいでしょう。……先程の魔法、なかなかの威力だったでしょう？ あれを人体に向けて発動すると、いい感じに穴だらけになるんですね。まっすぐ進むから人体の急所を避けれますし、かなり長い間苦しませることができるのですが……」

「……………！！ご、拷問する気かつ！」

「いえいえ。ただの例え話ですよ。ただ、僕はこれでも気は長いほうですが、それでも我慢の限界というものはありますからねえ」

そう言っただけで微笑みかけ、左手を意味ありげに掲げる。
さあ、これから魔法を発動しますよ、と言わんばかりに。

「ち、地下だつ！ 地下に牢がある！ そこに……」

蒼ざめた義銀がそう言いつつ、震える手で懐から鍵を出し差し出した。

「ありがとうございます。ではお礼はこれで」
最小の威力に抑えた『魔道波』を放ち、義銀の意識を飛ばす。さて……。

「……滝川さん。いるんでしょう？ 出てきてください」

僕の問いかけに頭上から返事があり、天井裏から忍び装束の一人の男がすつと降り立つ。

「いつもながらお見事な手腕ですな」

「お世辞はいいですから。思ったより苦戦しましたし。……ここ、

お任せしたいのですが、いいですか？」

「配下の者を呼びましょう。お手前はとうされるので？」

「もちろん地下へ行きます。それが目的ですからね」

「お供いたしましょう。……おい！　ここは任せた！　とりあえず全員縛っておけ！」

男……滝川一益の声に、やはり天井裏に忍んでいた数名の男たちが次々と降りてくる。

男たちは一糸乱れぬ動きで、気を失っている男や兵士たちを効率よく縛りあげていく。

「気をつけるよ。高久殿はお心が優しいからな。命を奪われた者はほとんどいないはずだ。意識を取り戻して斬りかかってくるやも知れんぞ？」

「……素直に甘いと言ったらどうです？」

皮肉に対し言い返す僕と、それに答えて大声で笑う滝川さんは、揃って地下へ向かった。

「——織田家家中の滝川一益と高久晃である！　皆の者！　怪我はないか！」

じめじめとした暗い地下牢。固い門によって封じられたその牢内には、十歳程度の少女から三十代くらいの妙齢の人まで、十人前後の女性が捕えられていた。

疲労し、色を失っていたその顔が、滝川さんの一喝によりみるみる力を取り戻す。

領民の織田家に対する信頼と人氣が窺い知れる一幕だ。

「織田様の……！ ああ、ありがとうございます！」

「助かったのね！」

「椿ちゃん！ これでお家に帰れるわよ！」

緊張が解けたせいかわき崩れる人もいる。無理もない。女性ばかりが浚われるということは、R - 18 的ないろいろな目的があつてのことだろうし。……それなのに十歳前後の少女がいるあたり、やっぱりあのおっさんは許せない。やはりもう少し痛めつけておくべきだったと思う。……と、それはともかく。

「……危うく流すところですが、僕は織田家家中の者じゃないですからね。何度も言いましたけど」

「『織田家家中の滝川一益と織田家に協力している高久晃である』とは長すぎるのでござるよ。細かいことはどうでもいいではありませんか」

「……ま、いいですけど。とりあえず……」

僕は牢内を見回す。

『斯波義銀の屋敷には女子供ばかりが捕えられている』……そんな噂を元に、探し人——先輩がいるかもしれないここまでやってきた僕。斯波義銀討伐はそのついでだ。

——あまり期待はしていなかった。でも実際にその中に目当ての人物、先輩がいないとわかると、やはり気落ちしてしまう。

「おりませぬか……？」

今までの軽快な口調と違い、僕を気遣うようにして問い掛ける滝川さん。

「……そのようです。残念ではありますが、織田様の領民を保護できたことだけでも良かったと思います。……えっと、皆さん、お怪我はありませんか？」

気持ちを切り替え、牢内の女性たちに努めて明るい声をかける。落ち込んでもいいことはない。さっ、仕事仕事っと。

「あ、あの……」

二十代半ばくらいであろうか？ 妙に色気のある女性が手を上げる。

「はい？ どこか痛みますか？」

「いえ。私ではなく、椿ちゃんが。抵抗した私を庇って棒で打たれました……」

そう言っ て目線を向けた先にいたのは十代半ば、僕と同じくらいの年頃の娘さん。

「えっ！ へ、平気です！ 椿は頑丈ですから！」

「嘘おっしやい。あんなに強く殴られたのに……」

僕は門を開け牢内に入る。椿と呼ばれた女の子はしきりに遠慮していたが、やや強引にその手を取り、袖を捲り上げてみる。……かなり酷い痣ができていた。うわ。痛そう。

「椿ちゃんは乱暴されそうになった私を庇って……。本当、すまなかったね椿ちゃん」

申し訳なさそうに目を伏せるお姉さん。

「…………… 滝川さん」

「なにか？」

「あのおっさん。ちょっと手酷く痛めつけておいてくださいね」
「承知仕った」

こんなかわいい女の子に手を上げるような男は万死に値する。今が戦国時代とはいえ、僕の中にあるルールに変わりはないのだ。

「さて。では失礼して」

僕は聖属性魔法の一つ、『治癒』を発動する。みるみる腫れが引き、きれいな肌色が甦る。

それを信じられないといった目で見ていた女の子が、はつとしたように言う。

「そのお力……そしてそのお姿。もしかして貴方様は『黒衣の魔術師』様では……？」

「え？ あ、いやその」
「如何にも。この方こそ我が織田家の護り神、『黒衣の魔術師』ごと、高久晃殿である！」

「た、滝川さん！ 恥ずかしいからそういうのやめてください！」
「何を仰る高久殿。拙者は事実を在るがままに述べているだけで……」

「じゃあそのにやけた顔はなんですか！？ 絶対僕の反応楽しんでますよね！？」

「気のせいでごさる。高久殿は被害妄想が激しいでごさるなあ」

「……まったくもう。と、とりあえず、これで痛みは引くと思います。お大事にね」

椿と呼ばれた女の子が、尊敬の眼差しでこちらを見つめるのに耐えかねて、ややぶつきらばうに言ってしまう。……こっぴどい苦手なんだよ……。可愛い女の子に対する耐性向上魔法とかないかなあ。ないだろうなあ。

「……さて、上も片付いたようでごさる。拙者は馬を飛ばして城に戻りますが、高久殿、ご同行されますか？」

「いや。僕、騎乗できないし。後ろに乗るのも怖いから飛んで帰りますよ」

馬上つて案外高いんだよね。早いし。

「……拙者からすれば、鷹のように遙か上空を飛ぶことのほうが、そら恐ろしく思えるものなのですが……？」

「それは感覚の違いっただけです。日が上ってから参内し、織田様にはご報告申し上げます。……では、滝川さん。また後ほど」

理解しがたい……と言った表情の滝川さんに別れを告げ、僕は地上に出る。

——月明かり。満天の空。初夏の気持ちいい風が頬を撫でる。

僕は『飛行』魔法を発動し、この世界での住処となる織田の城下町を目指して、ふわりと闇夜へ飛び立った。

第一章 第一部 黒衣の魔術師（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

第一章 第二部 織田舞奈

——翌日。清州城にて。

僕は昨晚の戦果の報告のため、織田様への取り次ぎを頼む。自分で言うのは恥ずかしいが、織田家の護り神、『黒衣の魔術師』の名前は城内の隅々にまで知れ渡っており、こういったとき、余計な詮索を受けず即座に謁見の間に通されるのはありがたい。

「——殿がお成りになりました」

側仕えの小姓がそう報告する、その声が終わるのも待たずに襖が開け放たれる。

「おう！ 晃よ。無事なようで何よりじゃ！」

豪快に言い放つその人物こそ、『この世界』における織田家の棟梁にして尾張国主。織田舞奈様、その人である。……そう。名前の通りの、うら若き女性国主なのだ。

日の光を受け輝く髪は炎のように赤く、異国の血が入っていると、いう本人の言を雄弁に示している。すらりとした長身はこの室内着よりも甲冑こそが似合うであろう。啜えたキセルが豪放な人となりを出し、信長の妹だというその姿を一層印象深くしている。

「滝川殿のご助力もあり、無事に帰参が叶いました」

そう言って頭を下げる僕。こういった言葉遣いに少しずつ慣れてきている自分に今更ながら驚く。たった数カ月とはいえ、僕もこの時代に馴染んできているかな。

「一益からも報告は受けておるぞ？ 自分は何もする必要もなく、

見ていただけでした、などと言っていたが？」

「滝川殿のご謙遜ですよ。おかげで助かりました」

「む。相変わらず固いのうお主は。我とお主の仲ではないか。もつと碎けて話せ」

「雇用主と被雇用者の関係ですから、これで問題ないかと思いませんか？」

「我はそちと会つのを楽しみにしてるというのに……。つれないのう」

そう言つてがっかりとした表情を浮かべる織田様。その手には乗らない。織田様がそういう顔をする時は、必ず僕を口説き落とそうとするときだ。もちろん性的な意味ではない。自分の家中に入れと何度も繰り返言われているのである。

「そうやって寂しがる振りをして、もう騙されませんか。……さつそくご報告したいのですがよろしいでしょうか？」

僕の言葉に先程とは別人のように表情を引き締める織田様。

「して、首尾は？」

「すでに滝川殿からご報告が上がっているとは思いますが、斯波一族の拠点は叩き潰しました。没われた織田様の領民も無事です。一族の棟梁、斯波義銀は滝川殿により捕えられました。」

「うむ。よくやってくれた。早速、義銀は追放処分しよう。……してその方の探し人は……？」

「そちらは残念ながら……」

「そうか……。すまぬのう。また兎には無駄足を踏ませてしまったようじゃ」

そう言つて軽く頭を下げる織田様。その様子を見て小姓が驚き固まってしまう。

「織田の棟梁ともあろう方が、そう簡単に頭を下げてはいけません」
「いや、我と晃は主従関係にあるわけではないからな。礼儀を尽くすのは当然じゃ」

「まあ確かにそうではありますけど……」

「やめてほしければ素直に我が禄を食め」

「それ新手の脅しですね。まったく手を変え品を変え、よく思いつきますね……」

呆れたように溜息をつく僕に、織田様は豪快に笑いかけた。

「それほどまでしてお主がほしいということじゃよ。そろそろ諦めろ」

「いやですよ。まったくもう……」

僕のいた世界のものとは少し違う、この世界の戦国時代。

魔法の存在も大きい、それと同じくらいに僕を驚かせたこと、それが所謂戦国大名たちの性別だ。信じられないことにその大半が女性なのである。

それには魔法と綿密に絡み合った理由がある。

この時代の合戦は刀や弓矢のほかに、魔法というものが基本戦力となっている。

遠距離攻撃ができ、その威力も十分である魔法は、しかし合戦時の主力とは成り得ていなかった。……あまりにも詠唱時間がかかりすぎるためである。一番簡単な攻撃魔法である『魔道波』ですら、詠唱に一分程度はかかる。戦場での一分は大きい。それゆえ、威力こそ強いとはいえ運用が難しい魔法は、合戦の主力というより、むし

る攻城戦などに使われることが多い。

……ちょうど、僕の元いた世界での火縄銃のような扱いなのだ。ちなみにこの世界には火縄銃は存在していない。異国から輸入されていないわけではなく、そもそもそういう物の存在がないらしい。多分、魔法がその代わりを務めているからなのだと思う。

……話を戻そう。——しかし、その長い詠唱時間によるリスクをも覆す大魔法が存在する。

群雄割拠する各戦国大名家が保持する、固有魔法——それは各大名家の一族だけに詠唱の言葉が伝わる、言わば秘中の秘で、各家の棟梁のみが使うことができる一撃必殺の大魔法なのだ。

例えば目の前にいるこの織田家当主、舞奈様も『閻魔火炎地獄』という、名前からして既に恐ろしい魔法を使える。同様に上杉家が使える『軍神降臨』、武田家の現当主が開発したという『風林火山』などが有名だ。

……大前提として、魔法使いには女性が圧倒的に多い。攻撃魔法の初歩となる『魔道波』程度ならともかく、それ以上の魔法ともなると、なぜか大多数の男性には習得することが出来ないためである。その理由は諸説あるが、上位魔法ともなれば精霊に語りかけ、その力を借りる必要があるため、繊細な女性の方が向いているのではないかと？ というのが有力だ。真偽のほどは不明だが、多分、それで間違いないであろう。

——つまり、この世界が女性上位というわけではなく、各大名家の誇る固有魔法を使えるのがほぼ女性だけであるため、最大の力を持つ者が一家の棟梁となる戦国の習いに従い、自然と女性大名

が増えていったのである。

「……しかし話を戻すが、晁の探し人は見つからぬのう……」

何となく、この世界の大名家のことを考えていた僕は、織田様の愁いを帯びた声によって意識が戻される。

「いつしよに飛ばされたとはいえ、確実にこの世界にいるという保証はありません。織田家の力抜きにしてはその僅かな可能性に賭ける情報すら手に入りませんし、余りお気になさらぬよう」

「私の勢力がもっと大きくなれば、更に精度の高い情報も届くのであろうかの。……まだまだ尾張一帯を手に入れただけの我が身には力が足りず、まったくもって不甲斐ないことじゃ」

そう言つてらしくない溜息をつく織田様。

「しかし織田様。斯波一族を討つたことにより、この尾張は統一を果たしたのでありましよう？ 力が足りず……などということはないかと」

「そうは言つてもな。晁よ。こんな小国、東の今川が動けばあつというまに滅ばされてしまふわ」

「今川……。現当主は今川義乃でしたっけ？」

「さよう。……三河の松平家を従え、北の武田、東の北条と同盟を組んだ今川の狙いは、上洛に間違いないと専らの噂。既に出陣の準備を終え、今日にでも駿河の国を立つという話すらある。……まったく、頭の痛いことじゃ」

「……………」

——僕は知っている。その噂が正しいということ。
そしてその結末が、僕の知っている歴史と同じになるとは限らないということも。

……あまりにも有名な『桶狭間の戦い』。

駿河の今川義元が率いる数万の大軍に、時代の風雲児織田信長が二千の兵で奇襲を掛け、その首を打ち取ったという日本史における一大事件。……これを転機とし、織田信長は天下へと覇を唱えることになるのだが、しかしその勝利は、お世辞にも戦略的とは言うことのできない偶然の積み重ねの結果だった。

華麗な勝利に目を奪われがちであるが、『たまたま』、信長が到着したその時、今川家は戦力を分散しており（とは言っても奇襲をかけた織田家の二倍以上の兵力はいたのだが）、『たまたま』急に降りだした豪雨を避け、今川の陣では臨戦態勢を解いており、『たまたま』今川本陣には戦闘経験が豊富な兵が少なかった……こういった、幾つもの幸運の積み重ねによる、言わば薄氷を踏むような勝利だったのだ。

歴史に『i f』は禁物だというが、その幾つもの幸運のうちひとつでも欠ければ、織田家の勝利はなかったとも言われる。……そもそも、十倍の兵力に対し奇襲を仕掛けるというのであれば、そのタイミングは明け方か夜半に行くべきである。その一点においても、

信長の出陣の時間はあまりにも遅すぎるのだ。明け方に出陣した信長の軍勢が戦場に到着したのは昼過ぎだった。とても奇襲に向く時間だったとは言えない。

勿論、折からの豪雨、今川陣の油断という戦術的好機を逃さず討って出た信長の判断力は素晴らしいものだ。しかし、そこに至るまでの過程が、まさに織田信長という男の持って生まれた『天運』と、本人の感性、直感とも言うべきものだけで成されており、そこが逆説的に信長の異名を高めるのである。つまり。

『桶狭間の勝利は、織田信長でしか成し得なかった』と。

……長々と自説を唱えてみたが、要点はそこなのだ。

元いた世界での戦国の覇者、織田信長と血を分けた実の妹とは言え、信長本人ではない『織田舞奈』では桶狭間に勝利することはできないのではないか？

——だからこそ、僕は迷うし、対応に困るのだ。

目の前の織田舞奈様は、僕が違う世界、その未来から来たということを感じてくれている。それでいて、僕に自身の未来を尋ねることをしない織田様の自制心には感心するが、ともあれ僕の進言であれば素直に聞いてくれると思う。つまり、僕には僕の知っている歴史通りに織田家を勝利に導くことができるのだ。

しかし、それは正しいことなのか？

古今東西、どのような物語においても、過去に飛ばされた登場人物が歴史に関与しようとする、そこには大抵、破滅が待っている。タイムパラドックスというやつだ。歴史を変えようとする、または歴史をなぞろうとする主人公が『時間』というものに翻弄される…

…僕は過去にそんな本を幾つも読んだことがある。

つまり、僕は恐れているのだ。

自分が歴史の傍観者ではなく、当事者になってしまつてしまつてを。

だから僕は度重なる舞奈様の勧誘に応えることができない。

精々、僕自身の人探しの『ついでに』、反逆勢力に捕えられた女子供の救出や、盗賊の討伐程度しか行えない。

本来であれば、それすら歴史に対する関与なのかもしれない。でも、僕も食っていかなくてはいけないし、生活の糧を得るためには仕方のないと自分に言い聞かせつつ、織田家の依頼を受け生活費を稼ぐ日々を送っているのだ。

「……っと、話しこんでしまったな。晁に会える機会はなかなかないので、偶に会えるとなついつい時間を忘れてしまつわ」

話を切り上げるように織田様が言う。国司たるもの、やるが多いのであろう。

「呼んで頂ければいつでも参上致しますのに」

「馬鹿者。今のは遠まわしに『いつでも会えるように城内に住め』ということと言つたつもりじゃ」

「そうじゃないかと思いました。……でもまあ、藤吉郎殿のお宅もなかなか居心地がよいものですし、そもそも家中に入る気がない者を、城内に住ませるわけにもいかないでしょ」

「ほんに強情な奴だのう……。まあいいわ。我は政務に戻るとする。
……この度は大義であつた。褒美は後ほど猿のところへ届けさせよう。以上じゃ」

「畏まりました。では私はこれにて」

……僕は深々と頭を下げ、謁見の間を辞した。

「晃！ 殿へのご報告は終わったのか？」

謁見の間を出て、手の行き届いた清州城の庭を歩いていると、背後から声がかかった。

「藤吉郎か。今終わったところだよ」

「晃は殿に気に入られておるからなあ。話も弾んだろ？」

僕は苦笑を浮かべつつ応える。

「相変わらずだよ。いい加減、勧誘は諦めて欲しいんだけどね」

「贅沢な野郎だ。俺なんか殿に取り入るために草履取りまでしたというのに！」

そう言つて笑いながら僕を小突く気さくなこの男。

僕の恩人にしてこの世界においては唯一の友人。そして大家でもある、木下藤吉郎。

——後の天下人、羽柴秀吉。まさにその人である。

「……で、今日はこの後どうするんだ？」

「んー。特にすることもないし、少し城下をうろついてから帰ろうかと思ってる」

「そうかそうか。つまり時間はあるということだな。うんうん」

にやりと笑う藤吉郎。……何だろう。悪い予感がある。

「……何を企んでいるんだ藤吉郎？ 素直に吐け」

「人聞きの悪いことを……。いや、実は滝川殿に頼まれごとをしていてな。ちよつと外まで付き合え」

そう言いつつ強引の僕の手を取る藤吉郎。

「お、おいっ！ 藤吉郎！ どこへ連れていく気だ！ 袖を引っ張るな！」

「いいからいいから。悪いようにはしないって」

「その発言をする人間は信じられないっ！ 離せっ！」

「まあまあ。行けば分かる」

「おいっ！」

……藤吉郎の馬鹿力に逆らえず、結局そのまま連行される僕であった。

「……で、目的地はこの茶屋か。男二人で仲良く団子でも食うのか？」

連れ去られた先は城下の端にある、小奇麗な茶屋。男二人で来て

も楽しくもない。まあ、ここの餡はなかなか上品な甘さで、結構気に入ってはいるんだけど。

「気色悪いことを言うな。滝川殿に頼まれたと言っていたらう？」

……おい！ 晃……じゃない、高久殿を連れてきたぞ！」

そう大声で店の奥に呼び掛ける藤吉郎。その声に呼ばれて出てきたのは一人の少女。

「あれ？ えっと、確か……椿さん？ だったかな？ 怪我は平気かい？」

「は、はい！ 高久様のおかげでもう痛みもありません！」

そう言いつつ慌ててぺこりと頭を下げたのは、斯波義銀のところに捕えられていた女子の一人、椿さんだった。

「そりゃよかった。……で、どういことだ藤吉郎？」

「そう睨むなよ。例の斯波義銀一派に捕えられていた女子供、これは滝川殿が村へ送り届けることになっているのだが、その前にこの椿とやらがな、命の恩人である『黒衣の魔術師』にどうしても一言、直接礼を言いたいと訴えたらしく、引き合わせてやってくれと頼まれてなあ」

「……………」

「いやいや。宮仕えの辛いところだ。上役に頼まれたとあつては断ることもできず、仕方なくこうしてお前さんを連れてきたというわけだ」

「明らかに楽しんでるよなお前」

「とんでもない。ただ、朴念仁の誰かさんに少しでも女子に慣れてもらおうと……」

「余計な御世話だ！ このっ！」

僕の振り上げた拳は、藤吉郎に軽く避けられてしまう。魔法を使

われない僕の攻撃など、戦場に生きる藤吉郎にとっては止まって見えるのである。なんか悔しい。

「まあまあ、そう怒るな。……では俺は行くからな。あとは好きにしろ」

そう言ってくるりと背を向ける藤吉郎を、慌てて引きとめる僕。

「お、おい！ どこ行くんだ？」

「どこってお前。城に戻るに決まっているだろうが。さっきも言った通り、こちらは悲しき宮仕え。日も高いうちから城を抜け出して女子と茶屋にしけこむような真似はできないだろ？」

そう正論で返されると何も言えなくなる。

言葉に詰まる僕の肩を抱くようにして、藤吉郎が小声で言う。

「……何なら今夜の晩飯は用意しないよう、ねねにも言っておくぜ？」

「なっ！ おまえっ……！ どういう意味だそれは！」

「……ま、たまには息抜きも必要ってことだ」

そう言って僕を離れた藤吉郎は、本当に城へ向かって歩きだしてしまった。

残されたのは僕と、椿と呼ばれた少女の二人。……なんか、気まずい。

椿さんもそう感じたのであろう。場を取り繕うように話し始める。

「あ、あの、先日は本当にありがとうございました！」

「あ、いえいえ。大したことはありません。気にしないで」

「きよ、今日はそれをお伝えしたくて……。すいません。お時間を取らせてしまいました……。ご迷惑でしたよね？」

「そんなことはないですよ。返って気を遣わせてしまい申し訳ないとは思うけど」

「そ、そうですか……」

うん。我ながらすごくきこちない。

藤吉郎に言われるまでもなく、僕ももう少し、女の子の扱いに慣れたほうがいいとは思うんだ。でもいかんせん、先輩が初恋だった僕にはその経験値が大幅に足りず、もじもじと居心地悪そうにしている椿さんを持て余してしまう。……いや、確かにね、先輩ほどじゃないとしてもこの子だって十分可愛いとは思うんだ。うん。ただね、だからこそ、その、対応に困るといつか……。

ぐーっ。

……その音は椿さんのほうから聞こえた。正確にはその腹部から。思わず目を向けた僕の視線の先には、真っ赤になって俯いてしまっただ椿さん。

「……椿はもう、お嫁にいきません……」

この世の終わりみたいな椿さんの声を聞き、なんか緊張が解けた。

「ぷっ。くくく……」

「わ、笑うのは酷いです！ あんまりですっ！」

涙目で訴えかける椿さんに、まあまあと手を向け、僕は店の奥に声をかける。

「すいませーん。団子を一皿とお茶を二人分。……ごめんごめん。実は僕もちよっとお腹がすいてたんだ。……よかったら付き合ってくれないかな？」

——僕のその言葉に、椿さんはやっと笑顔を浮かべてくれた。完
熟トマトみたいに真っ赤なままではあったけど、ね。

第一章 第二部 織田舞奈（後書き）

ご意見、感想などを頂けたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0600z/>

戦国の魔術師

2011年12月2日19時04分発行